

ソーシャル・キャピタル認知からみた大学生の人間関係が精神的健康に及ぼす影響

亀岡 聖朗

Seiro Kameoka : The influence of relationships among university students on their mental health from a view point of social capital recognition.

Abstract : Focusing on social capital recognition, the present study examined the influence of relationships of university students on their mental health. We measured structural social capital (the network size of human relationships of students) , subjective social capital (confidence and the reciprocity for others) and mental health (depressive symptoms, subjective satisfaction with life and physical satisfaction with the university) of 100 freshmen, and examined associations among the network size, the degree of the subjective social capital, and mental health. First, for each subject, i.e. friends for often together, classmate, and teacher, ANOVA was performed with network size as the independent variable and subjective social capital and mental health as the dependent variables. The results showed that the significant difference by the network size was not revealed, suggesting that subjective social capital and mental health did not increase when network size increased in each object. Then, for each subject, ANOVA was performed with subjective social capital levels (high, medium, and low) as the independent variable and mental health as the dependent variable. Results showed that higher subjective social capital related to better mental health. However, higher subjective social capital did not necessarily depend on bigger network size, and it suggested that suitable network size for the better quality of the subjective social capital for each object exist. Finally, necessary future studies were suggested.

Key words : social capital, mental health, university student, environmental adaptation

キーワード : ソーシャル・キャピタル, 精神的健康, 大学生, 環境適応

I はじめに

社会における人と人とのつながりが失われつつあり、人々の社会的孤立が進んでいることが指摘される(パットナム, 2006)。社会における対人的つながりは、私たちが自覚するとしないにもかかわらず生活を営む際に必要であり、生活環境が変わる際にはよく意識されると思われる。たとえば、転勤や転校などの環境移行の際、その変化にうまく適応して新たな生活環境に馴染むためには、個人の資質としてのパーソナリティ、社会的な問題解決能力、対人関係能力も必要とされようが、それだけではなくその環境が備える社会的ないしは制度的な関係性への帰属も無視できないであろう。それは職場であれば会社の配属部署内で、学校であれば所属する学級や部活動で、居住地であれば自治会や町内会、買い物の場所や病院などの生活を支える地域で見られる関係性である。こうした環境における関係性への帰属は私たちの生活の質にも関連し、生活環境に馴染んでいく要因として捉えられると思われ、近年注目されることの多いソーシャル・キャピタル(social capital: 以下SCと略記する)に通じると考えられる。本論ではこのSCを概説し、いくつかの研究例を分野別に示し、SCと大学生の大学環境への適応との関連を取り上げる。

1. ソーシャル・キャピタル

日本には、「お互いさま」、「持ちつ持たれつ」、「向こう三軒両隣」という言葉があるが、これらは私たちが暮らす社会におけるつながりを示す意味合いが含まれる。こうした社会におけるつながりがSCであり、パットナム(2001)は、「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的枠組みの特徴」と定義している。この概念は、社会科学、医学・看護学、経済学、経営学、心理学、環境科学など多様な学問分野において取り扱われており、具体的には経済活動、政治、地域の健全性、健康や福祉にかかわる領域での展開が見られ(藤澤ほか, 2007)、日本語では「社会関係資本」と訳されることが多い。

こうした社会における人と人とのつながりは、多くの場合、人々の協調的な行動を促すような対人的な信頼感や、何かしてもらったら(あるいはしてあげたら)お返しが生じるといった互酬性、そして人々のネットワークによって成り立つと考えられる。この3つの要素を例示したもののひとつが露口(2019)に基づく

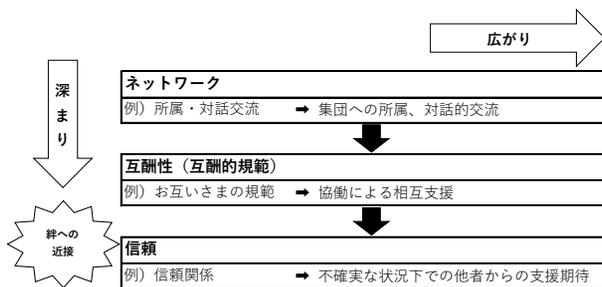


図1 ソーシャル・キャピタルの構成要素 (露口(2019)に基づき作成)

図1であり、社会におけるネットワークは一定の広がりを持っており、そのネットワークに属する人々の互酬性や信頼が深まると対人関係の形成に近づくという、SCの特徴を示したものである。このようにSCは、社会における人々の結束によって得られるもの(カワチ, 2013)であり、人々との関係性に埋め込まれたもの(稲葉, 2011)と捉えることができる。

また、SCの分類についての考察もある。表1は、SCをネットワークの特徴から結合型(bonding)と橋渡し型(bridging)に分けて比較したものである(パットナム, 2006)。結合型のSCとは、特定の組織内での人と人との同質的な結びつきで、その内部で信頼や協力、結束を生むものである。代表例として、家族や親族あるいは同窓会の関係性があげられるであろう。橋渡し型のSCとは、異質な人や組織を共通の目的で結びつけるものである。代表例として、NPO法人やボランティアの関係性があげられよう。近年ではこれらに加えて、異なる社会階層の個人や集団間をつなげる機能を有するとされる連結型(linking)を含めることもある(柏木, 2016; 志賀, 2017)

表1 ソーシャル・キャピタルの分類(結合型と橋渡し型)

分類の基準	類型	
	結合型(bonding)	橋渡し型(bridging)
性質	閉鎖的	開放的
形態	閉鎖的	開放的
程度	固い	ゆるやか
志向	内部志向	外部志向

パットナム(2006)に基づき作成

さらに、SCの構成要素の特徴に注目した構造的SCと認知的SCという分類もある。

前者はネットワークの持つ特徴によって位置づけられるもので、後者はネットワークの維持に寄与する規範や価値観や態度に類するものである。SCを構成する基本的な要素でいえば、構造的SCはネットワークの大きさや構成要素に関するもの、認知的SCは構造を維持するはたらきとしての信頼や互酬性に関わるものと分けできる(表2)。

表2 構造的ソーシャル・キャピタルと認知的ソーシャル・キャピタルの比較

比較の基準	構造的ソーシャル・キャピタル	認知的ソーシャル・キャピタル
源泉とその発現	役割と規則、ネットワークその他の人的関係、手続きと洗礼	規範、価値、態度、信念
領域	社会組織	市民社会文化
動的要因	水平的連携、垂直的連携	信頼、結束、協力、寛容
共通要素	互酬的協調行動への期待	

内閣府国民生活局(2003)に基づき作成

こうしたSCの概念は多様な分野で用いられ、都市の防犯、地域振興、人々の健康や生きがい、教育的な側面などに影響を与えることが報告されている。そうした報告では、SCが地域の安全や人々の健康に資する結果を示すものが多い。たとえば、都市における地域防犯の検討において、ジェイコブス(2010)は街中で街路の自然の店番ともいべき人々の無意識的に注がれる人目が安全に貢献する資産となることを指摘した。こうしたネットワークは、街頭で交わされる人々のささやかなふれあいにより時間をかけて形作られるものであるとし、都市の交

換不能な社会資本であると述べた。また、地域振興の面では、SCを高めることが地域振興に結びつき、その手段のひとつとしてスポーツ活動が挙げられている。たとえば松橋・金子(2014)は、自治体に取り組むホッケーによる地域振興の事例を取り上げ、そこで醸成されたSCがその地域における人々の信頼関係を形成し、地域の絆を高める効果があることを強調した。人々の生きがいや健康面では、地域のSCを高めることが住民の健康につながるとの報告がある。たとえば市田ほか(2005)は、高齢者を対象として地域要因としてのSCが地域在住高齢者の健康に好ましい影響を与える可能性を示唆し、木村ほか(2019)は、信仰心を持っている人が住民同士の交流や支え合いに積極的である可能性を指摘し、SCが人生への満足感と関連することを示唆している。

その一方、SC研究の課題として、その定義や下位概念、測定方法が統一されていないことやSCの負の側面も指摘されている。負の側面として相田・近藤(2014)は、凝集性が高い集団において過度のサポートの要求がある状況、多様性に寛大で無く個人の自由を制限するほど義務的に社会規範に従わなくてはならない状況、集団内の結束のために集団外の人を排除して時にしいたげることもあること、出世や進学をあきらめさせるようなメンバーの平均化をする規範があることを挙げ、それらが健康に負の影響を与えると指摘した。これらの側面は集団に必然的に見られる特徴と思われる、そうした状況を避けるための知見の蓄積も必要と考えられる。

2. 教育における研究例

教育面でSCを扱った研究例としては、学校を地域の資源として捉え、地域・学校・家族とのつながりの中で子どもを取り巻くSCを位置づけた露口(2016)による論考がある。そこでは、子どもを取り巻くSCを図2のように整理し、校区には子どもとその保護者と教師との関係を中心に、子どもと子ども、子どもと教師、保護者と教師、子どもの保護者同士、学校と保護者、地域と学校など多様なSCが取り巻くことを示している。これは主として子どもの豊かな学力の醸成に焦点があてられており、子どもを取り巻くSCのうち、いずれかが十分に機能しない場合でも、他のSCがそれをカバーすることで一定の教育効果が期待できることを意味している。こうした学習面のみならず、SCはいじめを受けた子どもの社会的孤立からの脱却を支援したり(安田, 2018)、不登校に至るまでの人間関係を豊かにする(吉田, 2018)ことで、問題の予防に資することが期待されている。

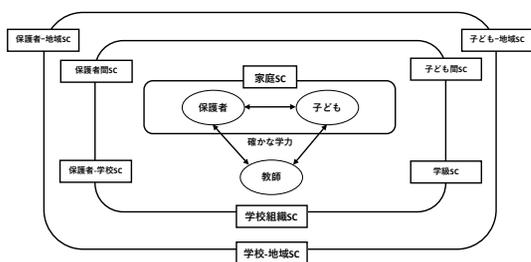


図2 校区におけるソーシャル・キャピタル(SC)次元(露口(2016)による)

一方で、教育面における大学生を対象とした学校環境適応の研究がある。たとえば、大学生の援助要請態度が大学入学前のスクールカウンセラーとのかかわりを通して入学以前に開発される可能性を指摘した研究(高田, 2016)、学生相談の立場から見たゼミ活動における授業適応の問題を取り上げた研究(東畑ほか, 2017)、大学へのリテンションや退学の心理的要因を学生の大学生生活充実度から検討した研究(坂田ほか, 2018)、大学への環境移行に伴う新入生ゼミ向けの学生相談室訪問プログラム実践の効果研究(矢部ほか, 2017)など多岐にわたる。学生の大学への適応を検討・支援する取り組みは、入学前の志望大学・学部・学科とのマッチングを図るためのオープンキャンパスや入学前教育の実施、入学後のオリエンテーションや宿泊研修や初年次教育の実施、あるいはガイダンスカウンセラーや在学生のピアサポーターによる新入生への適応支援などさまざまである。ここには、入学後の学生の退学・休学等の学籍異動を極力少なくしようという大学の意図が反映されているのであろうが、こうした取り組みについて坂本ほか(2013)は、学校の持つリソースに注目したSCの視点からまとめることができるとしている。そして、全国38の大学の協力を得て、教員の視点でとらえた学生の所属するキャンパスのSCの特徴、ならびに大学1年生を対象とした精神的健康と大学環境の構造的SCとの関連を、学校環境適応の文脈から検討している(芳賀・坂本, 2013; 坂本ほか, 2013; 芳賀ほか, 2015; 芳賀ほか, 2016; 芳賀ほか, 2017)。これらの検討の基本的な問題意識は、学生の認知的SC(人間関係における信頼や互酬性、同義の用語として主観的SCとも表現した)や構造的SC(人間関係のネットワーク・サイズ)が大きいほど、学生の抑うつ度が低く、大学への満足感が高いであろうという仮説の検証と、教員や学生相談の活動が学生の認知的SCに影響すると仮定した上で有効な取り組みを検討することだった。結果として、学生の認知的SCの高さや構造的SCの大きさが学生の精神的健康により影響を及ぼすこと(芳賀ほか, 2015)や、学生の認知的SCに影響する教員の活動として、仲間への認知的SCを高めるためには宿泊型のガイダンスが重要であること、クラスメートへの認知的SCを高めるには学生同士のつながり作りを意識した取り組みが必要であることを指摘している(坂本ほか, 2013)。

上述のような複数の大学の学生を対象としたSC概念による学校環境適応に関する検討は、認知的SCの高さや構造的SCの数量的豊富さが学生の精神的健康の度合いを高くし、ひいては学校適応へよい影響を及ぼすことを示唆している。では、それはすべての大学に共通することなのだろうか。さらには、学生個人が持つ知り合いや友人との付き合いの深さ(あるいは強さ)といった質的な側面は、精神的健康や学校適応の度合いに影響しないのだろうか。たとえば、仮に学生の人間関係を結ぶ友人・知人の数が少なくネットワーク・サイズが小さかったとしても、人間関係の結びつきが深ければ(強ければ)、精神的健康により影響を与えることも考えられる。そこで本論では、ある特定の大学の1年生を対象として、精神的健康を人生満足感、

抑うつ傾向、大学満足感とし、学生の人間関係のネットワークの種類およびサイズの大小が、主観的SCや精神的健康とどのような関連を示すのかを、芳賀ほか(2015)との比較も念頭において検討することを試みた。

II 目 的

本論では、学生がかかわる人間関係のネットワーク・サイズが大きいほど学生の精神的健康に良い影響を与えるのか、それは対象となる人間関係の違いによって異なるのかについて、ネットワーク・サイズと大学生のSC認知、精神的健康との関係から考察することを目的とした。なおSCの基本的な捉え方として、ここでは坂本ほか(2013)による個人が所属している集団とのつながりや身のまわりの社会環境から得る心理社会的リソースの認知を主観的SC(前掲までの認知的SCに該当)、そのリソースを生み出しうる社会的ネットワークや役割、組織、制度、規則を構造的SCと規定する定義を援用した。

III 方 法

1. 調査対象者ならびに調査方法

大学1年生 162名を対象として2014年1月から2月にかけて集団による質問紙調査を実施した。分析対象には162名中(回収率100%)の欠損値のない100名分のデータを使用した。対象者の内訳は男性18名、女性82名、平均年齢18.92歳(標準偏差0.94歳)で、いずれも国家資格受験資格の取得を目指す学科に所属する学生であった。また、調査対象となった大学は、大学・専攻科・短期大学部を合わせて全学生数が750名程度で、専攻科と短期大学部を除いた大学のみ全学生数は550名程度の地方都市に位置する比較的小規模な大学であった。

2. 調査項目の構成

調査内容は、プロフィール項目(性別、学年)のほか、構造的SCとしてのネットワーク・サイズ、主観的SC尺度、精神的健康の3つに大別できる。

ネットワーク・サイズでは「よく集まる仲間」、「クラスメート」、「教員」という3つの人間関係の対象を設定し、各々にかかわりを持つ人数を「1～2人」、「3～5人」、「6～9人」、「10人以上」、「特に思い当たらない」の5件法で回答を求めた(選択肢「特に思い当たらない」の回答者数は0名)。主観的SC尺度は、芳賀らが2012年の調査で使用した信頼・互酬性の認知やネットワークの想起・親近感を尋ねる11項目を使用した。それを「よく集まる仲間」、「クラスメート」、「教員」のそれぞれに対して「全く違う(1)」～「全くその通りだ(5)」の5段階評定で回答を求めた。表3に主観的SC尺度項目を示した(芳賀ほか, 2015)。

表3 主観的ソーシャル・キャピタル(SC) 尺度項目

(わたしは仲間について、)
基本的に良い人たちであると思う。
信頼できる人が多いと思う。
その人たちの考え方にはおおむね賛同できると思う。
身近に感じている。
会える機会には、積極的に行こうとする。
たまにその人のことが頭に思い浮かぶことがある。
話したい時に話す(コミュニケーションする)機会が十分にあると思う。
わたしの知りたいことについて詳しく知っている人が多いと思う。
助け合えると思う。
なにかお互いのためになることをしたいと思う。
接することで、新しい知識やスキルを得ることができると思う。

芳賀ほか(2015)による

また本論では、精神的健康として、人生満足感、抑うつ傾向、大学満足感の各項目を用いた。人生満足感Deiner et al.(1985)による5項目(「まったく当てはまらない(1)」～「非常によく当てはまる(7)」の7段階評定)、抑うつ傾向はKessler et al.(2002)による抑うつ尺度6項目(「まったくない(1)」～「いつも(5)」の5段階評定。低得点ほど低抑うつ傾向)、大学満足感は大塚への物理的満足感を尋ねる7項目(「全く満足していない(1)」～「とても満足している(5)」と、「かかわりが無い(0)」の6段階評定)を使用した。

3. 分析方法

まず、ネットワーク・サイズの違いが主観的SC、人生満足感、抑うつ傾向、大学満足感にどのように反映されるかを、「よく集まる仲間」、「クラスメート」、「教員」の人間関係別に検討した。ネットワーク・サイズを独立変数、主観的SC、人生満足感、抑うつ傾向、大学満足感を各々従属変数として、ネットワーク・サイズの5つの選択肢の回答者別に各従属変数の平均値と標準偏差(SD)を算出、一元配置の分散分析を実施した(多重比較はRyan法)。

さらに、主観的SCの違いが人生満足感、抑うつ傾向、大学満足感にどのように反映されるかを、「よく集まる仲間」、「クラスメート」、「教員」の人間関係別に検討した。主観的SCは調査対象者ごとに各項目の評定を合計し、その合計得点の上位25%の対象者を「高群」、下位25%の対象者を「低群」、その間の対象者を「中群」と3群に分けた。それらを独立変数とし、人生満足感、抑うつ傾向、大学満足感を各々従属変数として、3群の回答者別に各従属変数の平均値と標準偏差(SD)を算出、一元配置の分散分析を実施した(多重比較はRyan法)。また、主観的SCの「高群」と「低群」におけるネットワーク・サイズの分布についても補足的に検討し、主観的SCとネットワーク・サイズとの関係を確認した。

4. 倫理的配慮

調査は、筆者の所属大学(調査実施当時)の研究倫理委員会による倫理審査で承認を得て実施した。その際、調査結果から個人は特定されないこと、回答は匿名で調査への参加は自由意志であること、調査への参加・不参加は学業評価等と

無関係であることを調査用紙に記載，口頭説明もを行い，同意した者に対して実施した。

IV 結 果

1. ネットワーク・サイズと主観的SCおよび精神的健康との関係

ネットワーク・サイズを「よく集まる仲間」，「クラスメート」，「教員」の人間関係別に集計したところ，「よく集まる仲間」で「10人以上」，「クラスメート」で「1～2人」を選択したのはそれぞれ1名だった。そこでこの2名を分析から除いて集計した結果，「よく集まる仲間」では「1～2人」が17名，「3～5人」が62名，「6～9人」が19名，「クラスメート」では「3～5人」が4名，「6～9人」が7名，「10人以上」が77名，「教員」では「1～2人」が3名，「3～5人」が31名，「6～9人」が42名，「10人以上」が22名と，各人間関係でネットワーク・サイズの違いに大幅な偏りが見られた。このことから結果解釈に限界があることを踏まえて分析を行った。

人間関係別に分析した結果を表4に示した。まず「よく集まる仲間」を対象とした分散分析の結果，主観的SCのみ有意傾向が認められた($F(2,95)=2.45, p<.10$)。多重比較の結果，「3～5人」>「1～2人」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。主観的SC，人生満足感，大学満足感，5人までの場合，ネットワーク・サイズが大きくなれば値が高くなるが，6人を超えると増加が留まった。抑うつ傾向はサイズが大きくなると値は低下した。次に，「クラスメート」を対象とした分散分析の結果では，いずれの変数にも有意差は認められなかった。主観的SC，人生満足感，大学満足感，5人までの場合，サイズが大きくなれば値が高くなるが，6人を超えると増加が留まった。最後に，「教員」を対象とした分散分析の結果では，主観的SCのみ有意傾向が認められたが($F(3,94)=2.64, p<.10$)，多重比較の結果，水準間の有意差は認められなかった。主観的SC，大学満足感，人生満足感，サイズが大きくなれば値が高くなった。人生満足感，サイズが9人までは値が高くなるが10人を超えると増加が留まり，抑うつ傾向はサイズが大きくなると値は低下した。

2. 主観的SCの高低と精神的健康との関係

次に，主観的SCの「高群」，「中群」，「低群」の各調査対象者により，人生満足感，抑うつ傾向，大学満足感にどのような差異が見られるかを，「よく集まる仲間」，「クラスメート」，「教員」の人間関係別に分析した結果を表5に示す。

まず「よく集まる仲間」を対象とした分散分析の結果，主観的SC($F(2,97)=108.13, p<.01$)，人生満足感($F(2,97)=3.56, p<.05$)で有意差が，抑うつ傾向で有意傾向が認められた($F(2,97)=3.02, p<.10$)。主観的SCの多重比較の結果，「高群」>「中群」>「低群」の順で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。人生満足感の多重比較では，「高群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。抑うつ傾向の多重比較では，「高群」>「低群」，「中群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。「クラスメート」を対象とした分散分析の結果，主観的SC($F(2,97)=179.36, p<.01$)，抑うつ傾向($F(2,97)=4.31, p<.05$)，大学満足感($F(2,97)=4.44, p<.05$)で有意差が，人生満足感で有意傾向が認められた($F(2,97)=2.95, p<.10$)。主観的SCの多重比較の結果，「高群」>「中群」>「低群」の順で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。抑うつ傾向の多重比較では，「高群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。大学満足感の多重比較では，「中群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。人生満足感の多重比較では，「高群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。「教員」を対象とした分散分析の結果，主観的SC($F(2,97)=183.75, p<.01$)，人生満足感($F(2,97)=5.19, p<.01$)，大学満足感($F(2,97)=8.28, p<.01$)で有意差が認められた。主観的SCの多重比較では，「高群」>「中群」>「低群」の順で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。人生満足感の多重比較では，「高群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。大学満足感の多重比較では，「高群」>「低群」，「中群」>「低群」で平均値の差が認められた($\alpha=.05$)。

さらに「よく集まる仲間」，「クラスメート」，「教員」の人間関係別に，主観的SCの「高群」と「低群」でネットワーク・サイズを比較したところ，主観的SCの「高群」では「よく集まる仲間」で「3～5人」，「クラスメート」で「10人以上」，「教員」で「6～9人」の選択者が最も多かった。低群でも同様の傾向が見られた(表6)。

表4 ネットワーク・サイズごとにみた人間関係別の主観的SC，人生満足感，抑うつ傾向，大学満足感の比較(N，平均(SD))

ネットワーク・サイズ	よく集まる仲間				クラスメート				教員						
	N	主観的SC	人生満足感	抑うつ傾向	大学満足感	N	主観的SC	人生満足感	抑うつ傾向	大学満足感	N	主観的SC	人生満足感	抑うつ傾向	大学満足感
①1～2人	17	42.12(8.70)	17.53(6.20)	14.77(5.44)	20.18(6.64)	-	-	-	-	-	3	26.67(3.40)	14.00(1.63)	14.00(1.41)	16.67(3.86)
②3～5人	62	45.66(4.90)	18.79(5.66)	13.79(4.80)	20.29(5.71)	4	32.50(7.23)	17.75(4.76)	14.00(3.46)	19.75(1.92)	31	32.07(7.51)	17.26(5.41)	15.26(5.35)	19.16(6.14)
③6～9人	19	44.63(5.09)	17.74(5.45)	13.74(3.68)	19.74(4.33)	7	36.86(8.04)	15.71(6.73)	15.71(3.24)	21.43(7.40)	42	34.36(5.72)	19.29(5.82)	13.71(4.72)	20.79(5.12)
④10人以上			-			77	37.33(6.88)	18.42(5.72)	14.00(4.94)	19.84(5.66)	22	35.68(6.14)	18.77(5.89)	12.55(3.55)	20.86(5.73)
主効果 (F)		† 2.45	n.s.	n.s.	n.s.		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.		† 2.64	n.s.	n.s.	n.s.
多重比較			②>①										n.s.		

** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$
() はSD

表5 主観的SC得点の高低による人間関係別の人生満足感, 抑うつ傾向, 大学満足感の比較 (N, 平均 (SD))

主観的SC の高低	よく集まる仲間				クラスメート				教員						
	N	主観的SC	人生満足感	抑うつ傾向	大学満足感	N	主観的SC	人生満足感	抑うつ傾向	大学満足感	N	主観的SC	人生満足感	抑うつ傾向	大学満足感
①高群	23	51.35(1.24)	20.13(5.65)	11.91(4.69)	19.57(6.04)	25	45.36(2.94)	20.48(6.11)	13.00(5.27)	20.08(6.06)	24	41.79(2.47)	21.00(6.74)	12.79(3.52)	23.00(5.24)
②中群	44	46.25(1.68)	18.89(5.65)	14.25(4.71)	21.3(5.30)	47	38.68(2.76)	18.11(5.43)	13.15(3.65)	21.51(4.63)	51	34.16(2.11)	18.24(4.95)	13.98(4.91)	20.26(5.17)
③低群	33	38.52(5.25)	16.30(5.26)	14.94(4.37)	18.70(5.76)	28	28.71(3.99)	16.75(5.24)	16.11(5.14)	17.54(6.28)	25	25.12(4.61)	15.92(4.99)	14.96(5.14)	16.76(5.65)
主効果 (F)		**	*	†	n.s.	**	†	*	*	**	**	n.s.	**		
多重比較		①>②>③	①>③	③>①,②>①		①>②>③	①>③	③>①,③>②	②>③	①>②>③	①>③	①>③,②>③			

** p<.01 * p<.05 † p<.10
()はSD

表6 人間関係別にみた主観的SCの高低によるネットワーク・サイズごとの選択頻度の比較 (N (%))

人間関係別の主観的SCの高低	1~2人	3~5人	6~9人	10人以上	計
よく集まる仲間					
主観的SC高群	4(17.39)	16(69.57)	3(13.04)	0(0.00)	23(100.00)
主観的SC低群	7(21.21)	19(57.58)	7(21.21)	0(0.00)	33(100.00)
クラスメート					
主観的SC高群	1(4.00)	1(4.00)	1(4.00)	22(88.00)	25(100.00)
主観的SC低群	0(0.00)	2(7.14)	3(10.72)	23(82.14)	28(100.00)
教員					
主観的SC高群	1(4.17)	6(25.00)	9(37.50)	8(33.33)	24(100.00)
主観的SC低群	3(12.00)	9(36.00)	10(40.00)	3(12.00)	25(100.00)

()は%

V 考 察

1. ネットワーク・サイズによる主観的SC, 人生満足感, 抑うつ傾向, 大学満足感の特徴

本論では, ある特定の大学に所属する1年生を対象として, 「よく集まる仲間」, 「クラスメート」, 「教員」といった人間関係別にネットワーク・サイズの違いによる主観的SC, 人生満足感, 抑うつ傾向, 大学満足感への影響を検討した。人間関係の各対象へのサイズ選択頻度の偏りが見られたが, 「よく集まる仲間」では「3~5人」のサイズであれば主観的SCが高く, 精神的健康も概ね良好と考えられた。さらに「クラスメート」ではサイズが「10人以上」であれば, 主観的SCが高く, 精神的健康も良好であり, 「教員」でも同様の傾向を示すと考えられた。大学における人間関係は, 親密な関係性では平均5名ほどの人数, 通常の知り合いのような関係性は15名程度の人数から構成されるという指摘(内田ほか, 2012)や, 「クラスメート」で最頻のネットワーク・サイズや最も高い主観的SCが「10名以上」であるという先行研究(芳賀ほか, 2015)と比較すると, 本論の結果は概ねそれらに沿ったものであり, 現状の一般的な大学における実情を示すと考えられた。ただ, 「教員」の最頻のネットワーク・サイズが「6~9名」だったのは, 芳賀ほか(2015)の「3~5名」が最大であった結果と異なっていた。これは, 本調査の対象者が比較的小規模な大学に在籍しており, 学生一人に対して多くの教員の目が届く環境であることがより強く影響したのではないかと考えられた。すなわち, 調査対象者が国家資格受験資格の取得を目指す学科の学生で構成され, 学生指導面で学年担任と副担任がつくことや, 学習面でも1年次から多分野の教員の指導を受ける環境にあるという学科の特性によるものである。この点で相違が見られたことから, 大学におけるSCには各大学の特性が反映する部分があることが推察された。

2. 主観的SCの高低による人生満足感, 抑うつ傾向, 大学満足感の特徴およびネットワーク・サイズとの関連

続いて, 主観的SCの高低による人生満足感, 抑うつ傾向, 大学満足感への影響を検討した。人間関係における「よく集まる仲間」, 「クラスメート」, 「教員」の全対象で, 主観的SCが高ければ, 人生満足感が高く, 抑うつ傾向は低いことが示された。大学満足感についても, 基本的には主観的SCが高いと満足度も高くなる傾向が見られた。このことから, 学生が周囲の人間関係に信頼, 互酬性, ネットワークへの親近感を強く感じていれば, 精神的健康にもよい影響を与えると考えられた。学生の間関係において, 同世代の知人・友人の関係は重要であるが, 結果からはそれと同等に教員との関係も主観的SCを左右することが示唆された。また一方で, 対象となる人間関係別に主観的SCの「高群」が最も多く選択したネットワーク・サイズの人数を比較すると, 「よく集まる仲間」では「3~5人」, 「クラスメート」で「10人以上」, 「教員」で「6~9人」と異なっており, 主観的SCの高さは一概にネットワーク・サイズの大きさに依拠しないことが示唆された。

学校の人員規模が児童生徒の活動にもたらす影響についての古典的な論考に, バーカーほか(1982)がある。彼らは, 学校での授業等をはじめとする諸活動は, 時間と空間の一定の境界におけるヒトとモノ(対人的な環境と物理的な環境)の中で営まれるという観点から, 在籍生徒数が異なるアメリカ合衆国カンザス州の13の学校を対象として, 大規模学校と小規模学校で行われる生徒の活動の特徴を比較検討した。さまざまな結果が報告されているが, たとえば在籍生徒の約500名を境にしてそれより在籍生徒数の多い大規模学校では行事への生徒の参加率が低下すること, 生徒の学校での行動や満足感に関して小規模学校の生徒は大規模学校の生徒に比べて2倍以上の責任ある役割を果たしていることなどの報告がある。ここではSCの概念は使われていないものの, 学校への生徒のかか

わりの様相が、それを可能とする適当な人員規模すなわちネットワーク・サイズと関連することを示唆した点で、本論の結果と通底すると考えられる。また内田ほか(2012)は、身近な人間関係ではつきあいの数はつきあいの質への評価を低減させないが、より幅広い人間関係ではつきあいの数とその関係の居心地の良さを低減させるリスクを指摘している。これは、ネットワーク・サイズの大きさが、対象となる人間関係の種別によっては効果的にはたらくとは限らないことを示唆するもので、主観的SCの質を決める適当な構造的SCのサイズがあるのではないかと考えられた。

3. まとめと今後の課題

本論では、ある特定の大学に所属する1年生のネットワーク・サイズに注目し、基本的にそのサイズが大きければ主観的SCが高く精神的健康に良い影響を与えることが示された。ただし「よく集まる仲間」、「クラスメート」、「教員」という人間関係の違いにより、主観的SCの高さは一概にネットワーク・サイズの大きさに依拠せず、人間関係ごとに主観的SCの質を決める適当なサイズがあることも示唆された。さらに、調査対象の所属大学の学科特性が結果に影響することが推察され、大学や学科の特徴を考慮した検討が必要と考えられた。ただ、これらの結果および考察は、検証のためのさらなる調査が必要であることも指摘した。これは今後の課題である。

また、大学のSCと学生の大学環境適応の関連を検討するにあたって、さらなる今後の課題として、大学生を対象としたSC研究という点での課題も指摘できるであろう。大学環境のSCが学生生活における精神的健康を保つことに寄与するには、学生自身が大学に埋め込まれたりソースに気づき、そのソースを利用すること、利用することが学生本人にとっての適応に利することを実感する必要も生じてくるであろう。そして、大学側もそうしたリソースを学生に示すことが求められるであろう。その点で大学のSCは、自分も気づかぬうちにいつの間にか巻き込まれているといった本来SCが有すると思われる特徴とは異なり、人為的な環境への巻き込み方を検討することが必要となると考えられる。大学は修学期間が決められた環境であり、地域で自然発生的に生じ恒久的に続くSCとは異なり、学生にとっては仮初めの性質が強いものと思われる。そうした大学環境での人とのつながりを人為的に作ることで、学生の大学環境適応にどの程度寄与するかを考慮する必要もあると考えられた。

最後に、SCが排除の論理としてはたらくことがある点にも気を配る必要がある。SCを量的に豊富にすることは、学校で生じるいじめや不登校などの生徒の問題行動の予防につながる可能性を指摘した論考を取り上げたが、逆に、SCが集団への接近を妨げてしまうことも考えられる。これはSCの負の側面として取り上げたことに通じると思われるが、集団への同調圧力が高まるほどその集団の雰囲気や溶け込めない者が排除されることが生じたり、集団の中で自分が果たす責任を重く感じ

ぎてしまつて他者とつながることが負担に感じられてしまい、その場にはいるのだが実は活動に参加していないという、自ら活動を回避してしまうことが生じたりする可能性もあるということである。こうしたSCがもたらす負の側面も理解し、その防止策の検討も必要であると考えられる。カワチ(2013)は、ソーシャル・サポートに敏感な人とそうでない人がいるのではないかとこのことを問題提起しているが、同じようにSCに敏感でない人や敏感すぎる人がいるかもしれない。もしこうしたことが個人特性として見出せるのであれば、相応の対応も考えられるであろう。この検討も今後の課題である。

文献

- 相田潤・近藤克則(2014) ソーシャル・キャピタルと健康格差. 医療と社会, 24(1):57-74.
- バーカー・ガンブ(編著):安藤延男監訳(1982) 大きな学校, 小さな学校 学校規模の生態学的心理学. 新曜社:東京.
- Diener,E.,Emmons,R.A.,Larsen,R.J. and Griffin,S. (1985) The satisfaction with life scale. Journal of Personality Assessment, 49: 71-75.
- 藤澤由和・濱野強・小藪明生(2007) ソーシャル・キャピタル概念の適応領域とその把握に関する研究. 新潟医療福祉学会誌, 7(1):26-32.
- 芳賀道匡・坂本真士(2013) 大学生の認知的ソーシャル・キャピタルに関する質的検討. 日本大学心理学研究, 34:43-50.
- 芳賀道匡・高野慶輔・坂本真士(2015) 大学生活における主観的ソーシャル・キャピタルが、抑うつや主観的ウェルビーイングに与える影響—ネットワーク・サイズとの比較から—. ストレス科学研究, 30:102-110.
- 芳賀道匡・高野慶輔・羽生和紀・西河正行・坂本真士(2016) 大学生におけるソーシャル・キャピタルと主観的ウェルビーイングの関連. 心理学研究, 87(3):273-283.
- 芳賀道匡・高野慶輔・羽生和紀・坂本真士(2017) 大学生活における主観的ソーシャル・キャピタル尺度の開発. 教育心理学研究, 65:77-90.
- 市田行信・吉川郷主・平井寛・近藤克則・小林慎太郎(2005) マルチレベル分析による高齢者の健康とソーシャルキャピタルに関する研究—知多半島28校区に居住する高齢者9,248人のデータから—. 農村計画論文集, 7:277-282.
- イチロー・カワチ(2013) 命の格差は止められるか—ハーバード日本人教授の、世界が注目する授業—. 小学館新書:東京.
- 稲葉陽二(2011) ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ—. 中公新書:東京.
- ジェイコブス:山形浩生訳(2010) 新版—アメリカ大都市の死と再生—. 鹿島出版会:東京.
- 柏木智子(2016) 学校と地域の連携による校区ソーシャル・キャピタルの醸成. 露口健司編著, ソーシャル・キャピタルと教育「つながり」づくりにおける学校の役割. ミネルヴァ書房:東京, pp.64-86.
- Kessler,R.C., Andrews,G., Colpe,L.J., Hiripi,E., Mroczek,D.K., Normand,S.L.T., Walters,E.E. and Zaslavsky,A.M. (2002) Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. Psychological Medicine, 32: 959-976.
- 木村友昭・伊坂裕子・内田誠也・山岡淳(2019) 20項目版SKY式精神性尺度の信頼性および妥当性の検討—ソーシャル・キャピ

- タルとの関連に着目して-。日本応用心理学会第86回大会発表論文集, 96.
- 松橋崇史・金子郁容 (2014) 自治体のホッケー振興を促す地域資源の形成。地域活性研究, 5:191-200.
- 内閣府国民生活局 (編) (2003) 第2章 ソーシャル・キャピタルという新しい概念。ソーシャル・キャピタル-豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて。 https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report_h14_sc_2.pdf(参照日2019年7月26日)
- パットナム: 河田潤一訳 (2001) 哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造。NTT出版: 東京.
- パットナム: 柴内康文訳 (2006) 孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生。柏書房: 東京.
- 坂本真士・芳賀道匡・高野慶輔・西河正行 (2013) 学生のソーシャル・キャピタルを高めるための大学の取り組み: 大学教員への質問紙調査。日本大学人文科学研究所紀要, 86:151-171.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2018) 大学生活充実度と大学へのリテンションとの関連: SoULS-21を用いた縦断的研究。大阪樟蔭女子大学研究紀要, 8:39-46.
- 志賀文哉 (2017) ソーシャル・キャピタルの展開と有用性-地域生活と学校を考慮して-。人間発達科学部紀要, 12(1):129-137.
- 高田純 (2016) スクールカウンセラーとの過去の関わり経験が大学生の意援助要請態度に与える影響。学生相談研究, 37(2):108-117.
- 東畑開人・森田健一・加藤亮介 (2017) 内面に介入する現代高等教育に生じる困難について。学生相談研究, 38(2):109-120.
- 露口健司 (2016) 子どもの学力・学習意欲。露口健司編著, ソーシャル・キャピタルと教育 「つながり」づくりにおける学校の役割。ミネルヴァ書房: 東京, pp.12-31.
- 露口健司 (2019) 地域の教育活性化とスクールリーダー: 校内研修シリーズNo49, 独立行政法人教職員支援機構。 <https://www.nits.go.jp/materials/intramural/049.html> (参照日2019年9月2日)
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 (2012) 人間関係のスタイルと幸福感: つきあいの数と質からの検討。実験社会心理学, 52:63-75.
- 矢部浩章・中村仁美・設楽友崇 (2017) 新入生支援を図る学生相談室訪問プログラムの有効性についての長期的検討。学生相談研究, 38(2):133-145.
- 安田誠人 (2018) いじめへの対応と子ども育成支援-いじめの防止, 早期発見, 対処のための関係者の連携-。伊藤良高ほか編著, 現場から福祉の課題を考える 子どもの豊かな育ちを支えるソーシャル・キャピタル 新時代の関係構築に向けた展望。ミネルヴァ書房: 東京, pp.179-194.
- 吉田祐一郎 (2018) 不登校と子ども育成支援-地域における学校外機関・施設が取り組む多様な学習支援-。伊藤良高ほか編著, 現場から福祉の課題を考える 子どもの豊かな育ちを支えるソーシャル・キャピタル 新時代の関係構築に向けた展望。ミネルヴァ書房: 東京, pp.195-210.